

桜の下で

武口幸雄

福島県・五四・ギタリスト

「ギター習いたいんですけど」、私がギター教室を始めて最初に入門してきた生徒だった。大事そうにギターを抱え不安な表情で立っている君と目が合った瞬間、運命的な出会いの予感がした。花の如くあえかなる君、犀利さいりに富み、ひたぶるレッスンに没頭する姿は悠揚を自負する私の心情を揺らした。

「先生、禁じられた遊び」覚えてたから聞いて、三カ月でマスターした努力・才能には驚異を超え愛おしさを感じた。

「弦を押さえる場所はフレットの直ぐ下だよ」、故意に触れてると察してか君は慌て指を引つ込めたね。憧憬どうけいと醜みにくくも扇情する心を抑えることができなかった。出会って半年足らずなのに二人の事はすべて情懷けいばいとなって忘れることが出来なかった。

「結婚のこと考えないの」、君にかこつけて二八になる自分に自覚を促す問いかけでもあった。「まだ、一二歳だから」

「私と結婚しないか」突然のプロポーズにびっくりしていたね。

「一カ月考えさせて……」

「来月の二〇日六時、例の桜の下で返事待っているから」、私が言うや否や、君は逃げるようにして帰ったね。もう会えないような気がして後悔と虚しさ募るだけだった。一日千秋の思いで運命の日を待った。寂寥としたこの場所は君と一度来たことのあるお気に入りの場所だ。満開の古木は沈む夕日と淡い宵の明星の光色の織りなす中であつた。

「来る、来ない、来る」、片々が花占いのごとく風もない頭上から舞落ちる。一カ月間何の連絡もくれない君だけど今日の今、必ず「オーケー」し、来てくれることを確信していた。約束の時間だ。目を凝らすと下の小径をお似合いのポニーテールの髪形と真っ白なセーターと今流行りの紫紺のパンタロン姿が駆け登って来た。

私は何も言えなかった、が、君は小さく頷いた。力一杯抱きしめた。高鳴る鼓動と体の震えは止まらなかった。たった一カ月でも不確さを内包された「待つ」という思念はこんなにも辛いものであるかと実感した。

そして今始めて愛妻、君へ送る二七年前の思いを綴ったこのラブレター。